

山形県現代俳句協会会報

第32号
令和7年7月

読み方と詠み方

山形県現代俳句協会会長 大類つとむ

当会の役員を長くつとめられた柿崎案山子さんは、生前句会の選になるときまつて、「どう見ても俺の句が一番いいなあー」と言つてよく笑わせた。お人柄と共に懐かしい姿が強く印象に残つている。しかし皆笑つてはいたものの確かにそうだと思つたフシが無くもないだろう。

誰しも一句を成すには時間的にも空間的にも多くの思いを踏まえて作り上げている。もちろんそこにはその一句に於いてのみの事もあれば、無意識の経験感も大きく働いていよう。したがつて言うまでもなくどの誰よりも作者自身が一番よく知っているのも当然である。よつて「自分の句が一番」と思い込んでしまうのも致し方のない事である。むしろ自身の作を良しとしなければ創造性と実作に於いて甚だ情けない困つた事と言つても良い。となると問題は、「いかに一句を読むか」と言う事に尽きてくる。所謂鑑賞力である。

俳句に於いての事ではないが、私は普段思つている事のひとつに「知識と経験で考え教養で決定する」がある。知識と経験で決めた事の不安定さと物足りなさをよく見てきたからである。

これは選句の物差しにも言える事で、その物差しには明確に知識と経験の目盛りが刻まれているが、はたしてそれだけで弾力のある豊かな詩性に及ぶものには欠けているのではないだろうか。私は俳句（作句）の学び

の肝心な鑑賞にあると思つている。近年ちよつと気になる傾向を感じる事がある。「面白く読むもう」との意識がはじめから働いていることである。他人様と違つた読みをしてやろうというのであろうか。確かに面白い句は楽しい。しかしその鑑賞も面白味も正攻法であり本寸法でなければと思うのである。「俳」のもつおどけ、たわむれ、そむく等の意は、世相に浮遊する面白さと違い、どこまでも私たちの体の底に存在する根元的なものでなければなるまい。それを私たちは、「おかしみ」と呼んでいる。

俳句あるいは川柳も、さほどに面白おかしいものではなくともよい。常に人間の実直さと生真面目さと表裏一体と言ふべき同義語的なものである。山口誓子はこれを「あつ！」と教えてくれた。一句を成すとき、身体の内にあるこのような事を大切にしたいと思つている。

俳句に限らずさまざまな団体、グループの殆どが会員の減少と高齢化に頭を悩ませている。多ければ良いと言ふ訳ではないが、どうしても動きが鈍くなつてしまう事は否めない。そんな中、当会でももつともつと俳句の話を交わし、ときにぶつかつて有意義な時間をもてればと常々願つている。

うれしいことに、このところ若い会員の入会がつづいていく。私の知人にはゲートボールに嵌つた若者もいる。可能性はいつも絶えることはないであろう。

三年後には山形県現代俳句協会創立五十年を迎える。どのような記念の年にするか、会員の方々と共に考えていきたいと思う。

現代俳句の秀句を読む 9

福寿草家族のごとくかたまれり

福田蓼汀

さてさて、どの句にしようかと選ぶのに悩んでしまう。どうにも好きな句が多すぎる。その中で今回選んだのが、この句である。

黄金色の花とそのめでたさから正月の花として好まれていた福寿草。寄り集まつて咲く様子はまるで仲の良い家族のようである。

この句の中に私は、大きなひとつのしあわせがすぐ近くにあることを教えてくれているように感じている。

大泉秀明

福田蓼汀りょうてい（明治38年～昭和63年）

山口県萩町（現在の萩市）に生まれる。高浜虚子の門に入り、昭和15年「ホトトギス」同人となる。

23年「山火（やまび）」を創刊 主宰。山岳俳句で知られる。



県現代俳句協会総会句会

六月一日(日) 山形市テルサ

- 1 ①河よりも低きに遊ぶ花の雲 大類つとむ
 2 ①私も季節のひとつ寝釈迦仏
 3 夜桜がしきりに叩く抜苦門
 4 弥生淋しく四月は希鶴等の声 畠山カツ子
 5 子雀の亡骸跨ぐ朝一番
 6 ①早乙女にあらず田植機ただ一機
 7 人は皆かくも移り気散る桜 佐竹伸一
 8 ④還らざる人と日本蒲公英と
 9 春塵を集めて暗し最上川
 10 花アカシア犬にもあるやストライキ 木嶋 玲子
 11 ①積ん読を尻目に飛び出すみどりの日
 12 ②草山を駈けゆく子等や端午の日
 13 濃き色の蛙に恍れてしまいいけり 松浦 廣江
 14 ③夏空に似合う洗剤求めけり
 15 新緑に囲まれている空家かな
 16 囀りやアニーローリーこそはゆし 堀 尚子
 17 ②サクサクと食べたいやうな柿紅葉
 18 夏つばめ昨日のことは早忘れ
 19 ホバリング頻りへりになりたい熊ん蜂 東海林光代
 20 けら鳴くや渋滞の先陽の落ちる
 21 ②決断を迫られている春炬燵
- 22 トロールの寝息溜息青葉閣 須藤 結
 23 青鳶や百人の壁そそり立つ
 24 母からの着信のことヒメジョオン
 25 隠れ岩貌出す春の波かぶり 柏崎 青波
 26 ②すたすたと人を追い越す彼岸の僧
 27 桜吹く芸子が躍る地唄舞
 28 春疾風新築マンション値下げらる 井上 康子
 29 ①ラジオより「運命の歌」こどもの日
 30 ②電話先は自動音声竹の秋
 31 ①つちふるや声なき声を引き連れて 渡辺 竹女
 32 母郷とう青梅カリカリ産みにくる
 33 ⑤代掻きや均し馴らして空の青
 34 柳芽吹けり休耕田に列をなし 大志田 勇志
 35 ①春満月大悪日と日めくりは
 36 五月の風がわたくしを消してゆく
 37 ②非正規の職場漂流花筏 瀬野 史
 38 巢作りの下見番の土鳩はや
 39 ③コンクラーベ白煙上るリラの宵
 40 ②弾痕の昭和に蓋す鬼蔵 高橋 エミ
 41 ②青葉雨背の子かくれる傘を買う
 42 ③五ミリにも殻あり角あり蝸牛の子
 43 動物園桜吹雪の象の鼻 梅木 啓子
 44 春光や愛車は赤いトラクター
 45 ⑥母からの手紙の厚み牡丹咲く
- 46 ①山毛櫨の芽の万の輝き小学校 黒谷博楽子
 47 ①新人の入りし体操花一分
 48 解禁のごと春昼の肉うどん
 49 休憩に探す青空春近し 大泉 秀明
 50 ①枝先を彩る帽子雪下す
 51 ⑥春光やカーブミラーの多い村
 52 消印は桃色うさひ花吟行 津田よね子
 53 口紅はシャネルの真紅朝桜
 54 山形弁のラジオ体操チューリップ
 55 都わすれ山に畑に精を出す 阿部 雅子
 56 蕨仕事絶妙な灰加減なり
 57 かぼちや苗ほつとけ栗たん期待込め
 58 ②野良着にて豆パンロールを緑の日 吉岡 志波
 59 ①城塞の跡かたかごの花あかり
 60 ②豆飯に母の一升炊き思ふ
 61 ①左折のみ可能祭りの駐車場 滝口 然
 62 姫女苑伸びきつてゐる橋の上
 63 銅管に糸鋸沈む穀雨かな
 64 ①一生の教へ子二千さくらばな うながわえりも
 65 ⑤この沼で生まれし亀の花まみれ
 66 ②降るなら降れとチューリップ葉を広げ

※ゴシック体は特選句

※○の中の数字は、特選二点、並選一点で

九名の選句による合計点数

【特選句作品鑑賞】

8 還らざる人と日本蒲公英と 佐竹伸一

佐竹さんは今春四月第一句集「山峡」(やまかい)を上梓された。何よりお目出たいことである。どの句もその底に慈愛のような確とした存在があり、真摯で実直で私のようなおちやらかな句はひとつもない。ここに採った句も勿論同様で凛とした立姿が深くしかも清々しい。

ご存知のようによく目にするたんぽぽは、その殆どが西洋タンポポで日本原産のものは絶滅危惧種であったかも知れない。そのすっきり見なくなった私たち生粋の「蒲公英」と「還らざる人」を並べられるとどこか言葉に尽くせぬものが心奥に湧いてくる。

還るといふ字は数多ある「かへる」の字の中でも、どうしても戦地に赴いた兵士を連想してしまうのは私だけではないだろう。未だ還らぬ兵士がいるかぎり戦争は終わっていない。日本に、いや、日本蒲公英に還るはずだった人たちである。この「人」をどのように設定しても充分詩的なものであるが、逆にそれが難点と言えれば難点かもしれない。 大類つとむ

逝きて帰らざる人と日本蒲公英の組み合わせに然も有りなんと共感した。大振りで盛んな西洋蒲公英に押されてすでに絶滅危惧種になっている日本蒲公英に重ね合わせた人。自分自身に置き換えてみても思い当たる幾つかがある。私が着目したのは、自己の感情を上句に封じ込めて、然りげなく一句にまとめ上げた力量である。

畠山カツ子

14 夏空に似合う洗剤求めけり 松浦廣江

TVのコマーシャルみたいだが、折しも梅雨空の続く毎日である。しかし汗ばむ季節であつて、洗濯は欠かせない。「あー早く青空にならないかなー」といった溜息が聞こえて来る。せめて洗剤だけでも清々しい、爽やかな感じのものを買い求めた作者の心は、もう夏空だ。

木嶋 玲子

33 代掻きや均し馴らして空の青 渡辺竹女

冬を越した田圃の土塊は固く砕くのにかばかり苦労したことか。かつて代掻きは田圃に水を張って三回行ったと言ふこと。二度目までは牛馬に頼ったが、三度目は杵(えぶり)という農具で人が丁寧に平らにしたという。

機械化の進んだ今日でも、苗を植え易く整地するのは大変なことで、その様を均し馴らしてと詠まれたものと思う。

瀬野 史

一見、代掻きを説明しただけの句のように見える。しかし、「や」で切っていることから、上五と中七下五には間隙がある。つまり、作者の眼前には、代掻真つ最中の光景ばかりでなく、泥水の田も鏡面になりつつある田も広がっているのだ。全ての田が空の青を映すようになるまでには、それなりの時間がかかる。そのことを作者は「馴らして」と表現したのである。中七の同じ音のリフレインも心地よく感じられる。

佐竹伸一

39 コンクラーベ白煙上るリラの宵 瀬野史

コンクラーベと聞いただけであの一瞬が浮かぶ。世界中の注目を集めた白煙の重みを感じずにはいられない。余計な言葉は要らない、リラの芳香が緊張を和らげてくれた作品。

松浦 廣江

40 弾痕の昭和に蓋す鬼蔵 高橋エミ

この句を読んだ時ビリッと痛みが走った。太平洋戦争終戦のとき私は八歳だったので戦争の記憶と昭和は切り離せない。現在、昭和は懐かしい時代として振り返られ、戦争について語られることは少ない。「蓋す」とはまさにその通りである。戦争を知らない世代の作者がこの句を詠まれたことに感動した。

私たちにとって「鬼蔵」とは平和ボケだろうか。令和の今、「弾痕の昭和に蓋す」をしてはならない。

堀 尚子

45 母からの手紙の厚み牡丹咲く 梅木 啓子

何枚もの便せんに書かれた母からの手紙。家族の事だけでなく地区の些細な事も書かれていたのでしようか。用件のみの手紙と違い、子どもと情報を共用する安心感も母親には有るのだと思います。「牡丹咲く」のもつこり、ふんわり、おおらかさが母親のイメージを大きく膨らましています。

高橋 エミ

次ページへ続く

65 この沼で生まれし亀の花まみれ

うにがわえりも

今年生まれた子亀だろうか？沼の周囲は珍しいものばかりである。その上桜の花びらがどろんどん舞い落ちてきて背中に張り付く。蓋をされるようだ。が、それを取り除く術も知らない。如何にも春らしい景が素直に描かれる。読み手ほっとさせる一句だと思ふ。「花まみれ」が美しい。

東海林光代

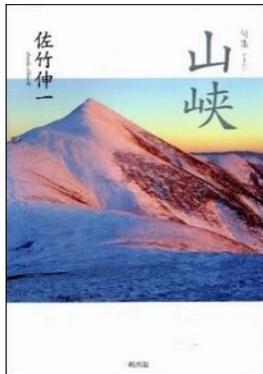
沼に棲む亀へ花びらが降ってきているという様子をまるで祝福のように描いている。花まみれという俗っぽい言い回しも、例えば祝勝会のビールのかけ合いや子どもが真剣に遊んだ後の泥まみれなどの「まみれ」を想起させてめでたいと感じさせる。この沼で、と書いたことで今目の前に花まみれの亀と、同じく花まみれの沼があるという臨場感もあり、作りが巧い。

滝口 然

句集紹介

佐竹伸一句集

山峡 やまかい



著者は山形県現代俳句協会事務局長、朝日山岳会長、朝日町在住。「小熊座」同人。

著者が撮影した大朝日岳の写真がカバーを飾る。

編年ではなくカテゴリー別に色の名前を冠した、金（くがね）―子ども達、青―春、朱―夏、白―秋、玄―冬、銀（しろかね）―妻の六章で構成されている。

冬の厳しい自然と止められない過疎、決して良いことばかりではない故郷を著者は愛してやまない。四季の移ろい、日々の生活を詠んだ句の色彩がなんとも美しい。「金」に収められた句は、学校で子ども達と触れ合う喜び、折々の子どもの姿が生き生きと詠まれていて教師でなければ詠めない句である。最終章の奥様の闘病と別離を詠んだ句は読むのが切なくなる。これらの句の底に流れているものは慈愛、慈悲と呼んでもいいかもしれない。そして、著者の山男らしい誠実な姿に、読み終えてすがすがしい感動で満たされる。

〈感銘句一五句〉

春光は跳ね黒板は深緑

前転の少女は蝶になりました

通る子のなき春休み道祖神

また一戸村を去りゆく春の雪

山峡の空へ空へと花の道

漕ぎ出せば少年の日々あめんぼう

帆を張って歩まん夏の縦走路

芋の葉に露配られているところ

原野へと戻りし田んぼ赤まんま

根雪とは天から雪を招く雪

山峡は海溝であり冬の月

這い上がる穴開け雪の中に住む

さよならを言わぬさよなら春の雪

蘇り来よ稲妻の絶えぬ夜に

傍らは亡き妻の席草紅葉

（堀）

編集後記

我が家の小さな庭にいろいろな野菜を植えて楽しんでいる。素人なので試行錯誤の連続だが、花をつけた一本のスナップエンドウに元氣付けられた。花の数だけ実を付ける力を私の作品にも欲しいと思った。

松浦 廣江

六月一日に山形県現代俳句協会の総会と句会が行われた。新会員の高橋エミさん、滝口然さんが参加され、誠に喜ばしいことであった。若い会員達から会の活動にエネルギーをもらえると期待している。

堀 尚子

会報32号 令和七年七月発行

発行人 大類つとむ

発行所 山形県現代俳句協会

〒九九七-四二二七
尾花沢市中町五-二〇

事務局 千九〇-一五五二

朝日町常盤に五二-一

佐竹伸一